

蕪栗沼周辺地域におけるガン類広域分布調査の結果について

チーム田力 田守村(たっしゅむら)小作人組合雁研究会 斉藤肇、高奥満、新野聡

宮城県北部の蕪栗沼、伊豆沼湖沼群周辺などには、日本で越冬するガン類の約90%が飛来越冬し、優占種は、マガン *Anser albifrons*、亜種ヒシクイ *A. fabalis serratirostris*、亜種オオヒシクイ *Anser f. middendorfi* である。これらのガン類は主に湖沼を「ねぐら」として利用する。通常、蕪栗沼をねぐらとするガン類は、日中になると周辺の水田部で落ちモミや水田雑草を採食する。そのため平成17年にラムサール条約湿地となった蕪栗沼とその周辺水田においてはガン類の保護管理を考える場合、単に蕪栗沼や周辺水田のみならず、採食行動圏を含めた広域調査が必要となる。本研究は、蕪栗沼で越冬するマガンを主体としたガン類について、日中の採食行動圏を明らかにする目的で、ガン類広域分布調査(プロジェクト名「フライングギースを追跡せよ」)を実施し、その結果の解析を行った。

蕪栗沼において2005/06越冬期にかかるガン渡来の初認は9月21日であったが、調査は安定越冬期から渡去期の12月~3月にかけて毎月1回、計4回実施した。調査範囲は蕪栗沼を中心に半径約10km範囲の水田地帯で、日中のガン類の分布を調査した。調査方法は、調査当日の早朝に蕪栗沼でガンの飛び立ち数をカウントした後、8時~12時の時間帯に4~6チームの調査班各々で調査区域を分担し、車で移動しながら水田等に飛来したガン類をカウントし記録した。調査記録にあたっては、ガン類の羽数に加え、ガン類が確認された水田の状況やガンの行動も記録した。また、ガン類の行動の変化をより明らかにするため、蕪栗沼に隣接する伸萌地区水田(142ha)において、越冬期間を通じ、日毎のガン類の分布状況も観察記録した。

調査の結果、積雪の少ない12月4日調査では、より沼に近い場所で多くのガン類を確認できたが、1月、2月と積雪が多くなるにつれガンの採食場はより広域に、またより積雪の少ない南東部に多く分布するように変化した。一方で、ガンの補足率(朝の飛び立ち羽数に対する水田部での確認羽数)は、12月と1月は3~4割程度のガン類が確認された。しかし、特に7万羽と最も多い飛び立ちをカウントした2月12日調査では、調査区域に設定した蕪栗沼から10km以内の範囲で確認されたガン類は飛び立ち数の24%程度となり、それまでの調査に比較して補足率が低い結果となった。これは、周辺水田部が冠雪したために、今回の調査区域よりさらに遠くにガン類が移動したことを示唆している。これら結果に加え、今回調査では稀少種のシジュウカラガン *Branta canadensis leucopareia* も毎回確認され、その月毎の移動状況も把握することができた。

伸萌地区で実施した詳細観察調査では、日毎のガン類の分布調査を実施したが、この調査についても、広域調査の結果を裏付けるように、積雪がある場所ほどガン類が少なくなるとの結果が得られた。

今後も以上のような調査を継続して実施していく予定であるが、2005年度調査では、蕪栗沼を越冬地にするガンの移動分布は10km範囲よりさらに広域に分布するとの結果が得られたため、今後の課題として2006年度調査では、さらに調査区域を拡大する予定である。

なお、今回の広域調査は下記の方々からの協力があって始めて可能となったものである。これらの方々に対しては貴重な時間をいただき、そして調査にご協力いただきましたこと、この場を借りて感謝申し上げます。

調査にご協力いただいた方々(敬称略、五十音順): 岡野由美子、安野翔、遠藤則靖、奥塚恵美、加藤明子、菊池玲奈、木村智、木村吹江、呉地正行、佐々木俊、鈴木耕平、鈴木淳子、鈴木康、齋藤海宥、駄賃場志乃、富樫悦夫、三田村綾子、三宅源行